

第74回  
企画展

# 徳島の旧制中学校

―県立徳島中学校創立二五〇年に寄せて―



徳島中学校



富岡中学校



脇町中学校



海部中学校



渭城中学校



撫養中学校



池田中学校



阿波中学校



麻植中学校

令和7年10月28日 火 ~ 令和8年1月25日 日

入場無料

徳島県立文書館 2階展示室 午前9時30分~午後5時

休館日 毎週月曜日・毎月第3木曜日(祝日の場合は翌日)・年末年始(12月29日~1月4日)

展示解説

日時: 11月23日(日・祝)・12月21日(日)・令和8年1月17日(土) いずれも午後1時30分から  
会場: 文書館2階講座室・展示室



文化の森総合公園  
徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山  
TEL.088-668-3700/FAX.088-668-7199  
<https://archive.bunmori.tokushima.jp/>



## いあごわい

文書館ではこれまで、企画展で県内の公立学校を六回にわたって取り上げてきました。第七十四回企画展は、今年度に創立百五十周年を迎えられる県立城南高等学校からのお話をきっかけに、『徳島の旧制中学校』を取り上げることとしました。

わが国の近代教育は明治五（一八七二）年公布の「学制」に始まりました。その第二十九章（条）で「中学ハ小学ヲ経タル生徒ニ普通ノ学科ヲ教ル所ナリ」と規定されました。明治政府は当初、初等教育の整備に力を注ぎ、教員養成のため東京・大阪等に七校の官立（国立）師範学校を設け、各府県に師範学校を整備させました。徳島県では明治七年に師範期成学校（現・徳島大学総合科学部）が設立され、翌明治八（一八七五）年に名東県師範学校附属変則中学校（現・城南高等学校）の設立が認可されたことが、旧制中学校の始まりとなります。

その後、明治十年代に脇町・富岡・川島の三校が開校しましたが、師範学校の火災及び経費的な理由等から、明治十八（一八八五）年に徳島中学校に統合されました。翌年の中学校令で「尋常中学校ハ各府県ニ於テ（中略）地方税ノ支弁又ハ補助ニ係ルモノハ各府県一箇所ニ限ルヘシ」とされたこともあり、徳島中学校一校体制が続きました。明治三十二（一八九九）年の改正中学校令で「北海道及府県ニ於テハ土地ノ情況ニ応シ一箇以上ノ中学校ヲ設置スヘシ」とされた後、本県でも中学校設立が相次ぎ、九つの中学校が開校されるに至りました。

中学校は「男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲ス」（明治三十二年中学校令）ことを目的としたように、生徒は男子限定、修業年限は五年とされました。現代と様相は大きく異なりますが、文部省年報で生徒数をみると、明治二十八（一八九五）年の徳島中学校一校時代最後の年に五〇二名、脇町・富岡中学校が独立した明治三十二年には三校で一、〇六三名、昭和九（一九三四）年（戦前の生徒数がわかる最後の年）には八校で四、一五四名と順調に増加しています。当時の人々、社会の教育に対する思いや期待の表れと言えるでしょう。

過疎化や生徒数の減少が進む状況において、令和十一年度入試からの普通科の学区撤廃等も見据え、県教育委員会が「徳島県公立高等学校の在り方検討会議」を発足させるなど、本県では今後の高校教育の在り方が議論されています。こうしたなか、戦前のこととはいえ、急速に整備が進められた旧制中学校の歴史を振り返ることは、意義深いものと考えます。末筆になりますが、本企画展の開催にあたり、資料調査や貴重な資料の貸出等に御協力くださった各高等学校に感謝申し上げます。

令和七年十月二十八日

徳島県立文書館長

山田 正之



## 徳島中学校（現・城南高等学校）

明治新政府は新たな教育制度として明治五年に学制を公布する。その第三十章に「当今中学ノ書器未タ備ラス、此際在来ノ書ニヨリテ之ヲ教ルモノ、或ハ学業ノ順序ヲ踏マシテ洋語ヲ教ヘ、又ハ医術ヲ教ルモノ通シテ変則中学校ト称スヘシ」とあり、教育環境にいくらか不備や不足があっても「変則の中学校」として認めていたことがわかる。徳島中学校の始まりは明治八年に認可された「名東県師範学校附属変則中学校」。その後、高知県への編入や徳島県としての再独立、法令の改正などによって校名の変遷は少なからずあるものの、その歩みは現在の城南高校まで連続と続いている。本年令和七（二〇二五）年は創立百五十年にあたる。

開校時、校舎は徳島城西側の旧藩校「長久館」跡地にあった師範学校との兼用だった。明治十二（一八七九）年に独立し、現在徳島市役所が建つ地へ移転。さらに翌年には富田浦町（現・両国橋）の女子勸工場跡へと移った。明治十八年には、現在徳島県庁が建つ地に新築の校舎を建設し、火災により校舎を失った師範学校と、校舎の狭隘化に悩んでいた徳島中学校をともに移転させた。それからおよそ五十年が経過した昭和八（一九三三）年、この



徳島中学校生徒（明治43年）

時すでに師範学校は常三島（徳島市内）に移転しており、校舎の主は徳島中学校のみになっていたが、建物の老朽化のため八万村（現・徳島市城南町）への新築・移転が決まる。この時、机・椅子・教材・黒板など今後も使用可能な備品を、生徒・教員が力を合わせて新校舎へ運び込んだ。当時の記録には「トラック二台」「馬車四台」「大八車四十五台」などとあり、大移動だったことがわかる。しかも季節は梅雨時の六月。雨に降られながらの作業も度々だったようだ。校舎はその後、戦火による焼失、経年による老朽化など幾度かの建替えを経て、現在に至っている。

## 徳島毎日新聞（徳島中学校創立五十周年記念特別号）

昭和四（一九二九）年二月十八日付の徳島毎日新聞。創立五十周年を迎えた徳島中学校の特集記事が見開きで掲載されている。寄稿者は当時の校長、第一回卒業生、旧職員などである。旧職員であり、当時光慶図書館（現・徳島県立図書館）の館長であった坂本章三は、「我が徳中五十年間の出身者無慮五千中に偉大なる活躍家の多からざるを遺憾と存じます」と述べている。同じく旧職員の岡本由喜三郎も「素質の良い学生でありながら徳島県人として社会の各方面に人材の輩出する率が頗る悪いのは如何なる理由であろうか」と同様の意見を寄せている。五十周年記念号であるのに、何とも辛辣である。何をもって「活躍」「人材」とするのか、数字的な根拠があるのかなど問題点はあるが、関係者の一定数が当時共通して感じていたことではあるのだろう。

## 徳中生の居住を示す標札

昭和二十年前後に使用されていたと思われる木製の標札。当時の「生徒心得」に、標札についての記載がある。「生徒ハ其宿所ノ入口ニ於テ最モ認メ易キ箇所ニ学校所定ノ標札「中某」ト記セルモノヲ掲グベシ、但中字自宅ハ朱色、下宿ハ黒色トス。」展示物は、上部に校章である中の字が朱色で押され、その下に氏名が墨書されている。規定通りであれば、これらは自宅生のもことになる。家庭訪問の際の利便性向上のためであったり、成績通知を便の者が家庭に直接届けていたことであつたりが標札設置の理由ではないかと考えられている。現代では、どの学校に属しているかを玄関先に示すことなど社会的に許容されないだろうが、当時は徳島中学生としての自覚と誇り、そしておそらくは優越感をもこの一枚の札に込めていたのではないだろうか。



徳中生標札



徳島毎日新聞記念号（昭和4年）



## 脇町中学校（現・脇町高等学校）

明治期からの教育史資料を七千点以上所蔵する脇町高等学校の芳越歴史館。創立九十周年記念の一環で昭和六十一（一九八六）年に設立された。展示資料の一つである旧制中学校時代の門標は金属製でかなりの重量があり、その歴史の深さを物語っている。

旧制脇町中学校は、徳島尋常中学校（現・城南高等学校）第一分校として、明治二十九（一九八六）年に開設されたのが始まりである。日清戦争後の産業振興を背景とした教育熱の高まりの中、明治三十二（一九九九）年に独立し、脇町中学校となる。

同校は吉野川北岸に位置し、脇町随一の高所に建設された。大川と名山にあたる吉野川と高越山から名付けられたのが校誌「芳越」である。独立した翌年に徳島一船戸間（現在の川田駅西）まで鉄道が延長。渡船を利用していたため、川が台風などで増水すると、南岸地域からの通学生は公然と授業を休むことができたという。昭和三（一九二八）年に穴吹橋（現在は架け替えてふれあい橋）が架橋され通学の便は向上した。昭和九（一九三四）年の新校舎への建て替えなどで教育環境が充実する一方で、軍事教練の重視など戦争の影響が色濃くなっている。

昭和二十三（一九四八）年、戦後の教育改革により脇町中学校は廃止され、その歴史は脇町高等学校に引き継がれていく。

### 自明治三十二年至同三十八年 教務日誌

日々の出来事や生徒の出席状況などを教職員が書き記した学校の記録である教務日誌。同校には戦時中を除く八十年分以上が保存されている。明治三十二年の日誌には、徳島・岡山・香川方面への徒歩での修学旅行、正しい制服の着用を検査する「服装試験」「再試験」、元旦に集まる「新年拝賀式」、大阪開催の第五回内国勧業博覧会への参観費用積立などの記載があり、当時の学校生活がわかる大変貴重な史料である。



教務日誌（4月11日条）



教務日誌（表紙）

## 富岡中学校（現・富岡西高等学校）

旧制富岡中学校は明治二十九年四月に徳島県尋常中学校第二分校として開校し、同三十二年四月に徳島県富岡中学校として独立した。戦後の教育改革の中で、昭和二十三（一九四八）年四月に徳島県富岡第一高等学校となり、高等学校再編により翌年四月に富岡西高等学校となって現在にいたっている。

### 昭和二十二年四月起 寮務日誌 日新寮

明治時代から富岡中学校の生徒は県南各地から集まっており、そのかなりの部分で寄宿生であった。当館蔵の公文書の中には、昭和前期の「出買物帳」「蔬菜日計簿」など同校の寄宿舎関係の簿冊が含まれている。その中の「昭和二十二年四月起 寮務日誌 日新寮」は旧制最後の一年間の寄宿舎の日誌である。ページを開いていくと舎監たちが記した「淡島（海岸）へ遠足」「音楽祭見学の為外出」「映画見学」「夜気温ルニ付風邪ヲヒカヌ様注意」「自習時間中雑談スル者アリ 夫ニ注意ス」「未ダ廊下歩行ノ際静粛デナイ者アリ 注意ス」「二階三号室窓ヨリ櫻ノ木ニ登リ居タルヲ以テ厳戒」といった当時の寄宿生の姿が生きて浮かび上がってくる記載に満ちている。それと同時に、「衣料配給品分配」「夕食後DDT散布 効果確実ナリ」「寮生全員放課後横見（農園）へ麦刈ニ行ク」といった時代を感じさせる記述も散見する。



第十回卒業寄宿生寄贈の「時報の鐘」



昭和二十二年四月起  
寮務日誌 日新寮  
「DDT入手デキル旨」  
の記事が見られる



## 撫養中学校（現・鳴門高等学校）

旧制撫養中学校は、地元有志の請願により、明治四十二（一九〇九）年四月、板野郡（現・鳴門市）撫養町に開校した。第一回の入学生は二学級九十六名で、学制改革により昭和二十三年三月に廃止されるまで、約四十年の間に合計二、八八五人の卒業生を輩出し、同年四月に発足した新制徳島県鳴門高等学校へ引き継がれた。

校舎は教室、講堂とも二階建てで、生徒控室兼剣道場、柔道場などを備え、図書館は認可を受けて「登龍図書館」と称する私設図書館にもなっていた。県下各地から入学者があつたため、大正年間には二階建て寄宿舎二棟に食堂、浴室などを完備していたが、これら校舎の大部分は終戦の翌年に火災で焼失している。

### 校友会雑誌

「校友会雑誌」は現在の校誌に似た校内機関誌で、教員の寄稿や卒業生からの便り、在校生の論説・文芸作品等のほか、年間行事や校友会各部の活動記録に加え、付録として教職員及び卒業生の一覧が付く。当館が収蔵する第七号から第二十三号まで（第二十号・二十二号抜け）が発行された時期は、第一次世界大戦や関東大震災、大正から昭和への改元を経て再び戦争に至る激動の時代であり、掲載された文にもそうした出来事を取り上げられている。公式な史料には表れない、当時の生徒のありのままの学校生活や内面、世の中の捉え方を知りうる資料として意義深い。



撫養中の生徒たち（昭和18年）



校友会雑誌第7号 表紙（大正10年）

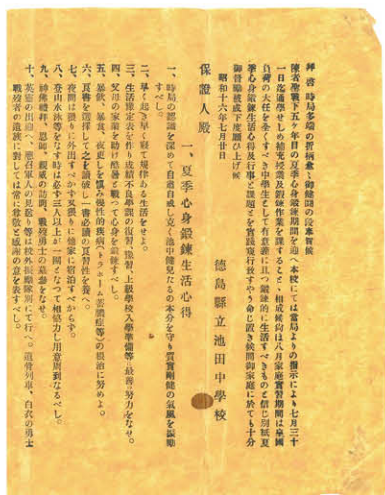
## 池田中学校（現・池田高等学校）

旧制池田中学校は、大正十一（一九二二）年四月に徳島県立池田中学校として三好郡池田町（現・三好市）に設立された。設立当時は、池田尋常高等小学校（現・三好市立池田小学校）の敷地内に仮校舎が建てられていたが、翌年四月に新校舎ができたことで移転している。

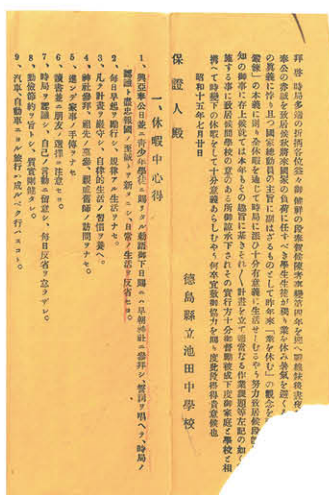
昭和二十三年の教育改革により、池田高等学校へと名称が変更される。かつては、祖谷に分校をもっていたが現在は廃止されており、その後平成二十九（二〇一七）年、辻高等学校（三好市井川町）・三好高等学校（三好市池田町）を統合し、本校・辻校・三好校の三校体制になって現在に至る。

### 夏季休暇中心得（昭和十五年・十六年）

現在でも夏休み直前になると学校から夏季休業中の生活や学習について記載されたプリントが配布されるが、それと同じものである。早起きなどの規則正しい生活・読書の推奨など現代にも通ずる指導内容が見られるが、「神社参拝、祖先ノ墓参、親戚旧師ノ訪問ヲナセ」「心身ノ鍛練ヲ行へ、特ニ毎朝ラヂオ体操ヲ実行セヨ」などの記載もある。当時の時代背景もあるが、生活面に対する心得として明記されていることが面白い。また、「汽車・自動車ニヨル旅行ハ成ルベク行ハヌコト」との記載がある。長期休暇こそ遠出のチャンスではないかと考えるが、当時の交通手段に対して、安全面に不安があつたからだろうか、学校としては控えて欲しかったようである。



夏季心身鍛練生活心得（昭和16年）



夏季休暇中心得（昭和15年）



## 阿波中学校（現・阿波高等学校）

旧制阿波中学校は、大正十二（一九二三）年九月に設立が認可され、翌年四月に開校。第一期生百名が入学した。設立当時、阿波郡には中学校がなく、交通の便も悪かったため、中学校に通うためには家を離れなければならず、向学の念があっても多額の教育費を理由に諦めざるを得ない状況にあったという。しかし、大正九（一九二〇）年、各郡市に中学校を一校ずつ開校することになり、阿波郡にも念願の中学校が開校。

その後、昭和二十三（一九四八）年の教育改革により阿波第一高等学校と改称。翌年四月には阿波第二高等学校（旧阿波高等女学校）との統合により柿島高等学校が開校。同年七月には阿波高等学校と改称された。

校地の候補には、阿波郡中心部の市場町、東部の八幡町、上板の一条町（いずれも現・阿波市）などが挙げられたが、柿島村（同）在住の実業家・手東平三郎が校地一万坪などを寄附したことで、柿島に校舎を建てることとなり、大正十五（一九二六）年五月に落成。柿島高校発足時にも同校舎がそのまま使用され、現在に至る。

### 大正十三年四月起 教務日誌

大正十三年四月から翌年三月までの教務日誌。四月八日に行われた最初の入学式の記事から始まる。欠席した教師と、代役で授業をした教師の名前を記録したものがほとんどだが、時折生徒への注意や行事についてなども記録されている。

入学から間もない五月、六月には「草履の整理整頓が乱雑なので今後は整頓するように注意した」、「昼食時に梅干しの種や沢庵、紙類を外に捨てる者がいるため注意した」との記事があり、おほかで自由に過ごしている生徒の様子がうかがえる。

また、同年七月の校舎起工式や、翌年三月に普通教室生徒控所、便所などが完成し、間借りしていた柿原小学校から新校舎へ移転した際の様子も記されている。開校当時の貴重な記録と言える。



教務日誌（表紙）



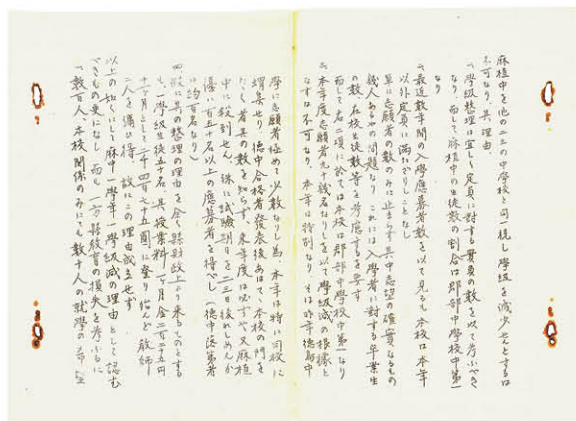
教務日誌（入学式関連）

## 麻植中学校（現・川島高等学校）

現在の川島高等学校は、大正十四年に新設された旧制麻植中学校に起源があるが、実は麻植郡内には明治十三（一八八〇）年に川島中学校が設置されている。しかし、川島中学校は明治十八（一八八五）年に徳島中学校へ合併され、約六年という短期間しか存在しなかったため、資料がほとんど残っていない。現在の川島高校とも関係がない。それから約四十年後に誕生したのが麻植中学校である。大正十四（一九二五）年に仮校舎として使用していた麻植郡内の公会堂から現在の場所へ移転。『新興』第二号によると、昭和四（一九二九）年の校舎落成式では、駅頭に大アーチを作り、駅前から学校に至る路上には、小国旗を引きめぐらしていたようで、町を挙げての祝賀気分だったという。昭和二十三年の教育改革により徳島県立麻植高校となり、翌年には高校再編により川島高校と改称されて共学となった。平成十六（二〇〇四）年に、旧制中学校に由来を持つ学校の中で唯一となる中高一貫校となる。令和六（二〇二四）年に高校は創立百周年、中学校は創立二十周年を迎えている。

### 麻植中学校の学級数削減に対する抗議書

昭和前期に書かれた、学級数削減に対する抗議書がある。当時は一学年二学級、第五学年まで十学級で編成されていたが、その後、学年ごとに一学級ずつ減らして半分の五学級に再編成しようとする動きがあった。抗議書は「麻植中を他の二、三の中学校と同一視し学級を減少せんとするは不可なり」から始まる。この年の志願者が定員割れしたことは認めつつ、その理由を「本年は特別なり」とし、前年の徳島中学校への志願者が極めて少なく、その揺り戻しで同校に志願が集中した影響であると述べている。徳島中学校の合格発表後、多くの不合格者が慌てて麻植中学校の門を叩いたとして、来年度以降の志願者数確保に自信をもち、学級数削減の中止を求めている。昭和十三（一九三八）年の「徳島県立麻植中学校入学案内」には「各学年二学級宛合計十学級」とあり、抗議の甲斐があつてか、学級数はそのまま維持されている。



学級数削減に対する抗議書



## 海部中学校（後の日和佐高等学校、現・海部高等学校）

昭和十一年ごろの作成と思われる「徳島県立海部中学校 学校沿革史」によれば、旧制海部中学校は大正十五年に認可され、海部郡日和佐町（現・美波町）に開設される。「日和佐町史」に掲載された当時の日和佐町議花本房太郎の手記には、「中学校ガ若シ牟岐町ニ設置セラルル事トモナレバ、愈々以テ牟岐町ガ本郡ノ首府トナリ、（中略）将来我ガ日和佐町ニ及ボス悪影響少ナカラズ」とあり、中学校創設について郡内での競合があったようだ。

戦後の教育改革により海部中学校は海部第一高校、日和佐高校と改称。各地に分校や分教場が設置され、長らく県南教育を牽引してきたが、平成十六（二〇〇四）年に海南高校・宍喰商業高校と合併し、閉校に至っている。

### 親展文書綴

昭和十二年から昭和二十四（一九四九）年までに海部中学校が作成もしくは取得した公文書群。海部中学校時代の公文書としては唯一のものと言ってよい。中でも昭和十九年の徳島県立中学校規則改正に関する文書が興味深い。改正により、海部中学校の生徒定員は四百名から六百名に増やされる。その理由を「本校入学志願者ハ毎年増加シ、昭和十九年度ニ至リテハ入学者定員ノ二倍以上ニ達セリ、本年度ハ疎開児童入学ノタメ更ニ激甚ナル増加ヲナス見込ナリ」と述べている。また、「本校ハ通学範囲広クシテ、東ハ那賀郡、西ハ高知県甲ノ浦、北ハ美馬郡祖谷山ニ跨リ、県南僻陋ノ山分地方ノ子弟ヲ收容セリ」とある。向上心をもった若者が各地から日和佐の地を集っていたことがわかる。現在、美波町は「にぎやかな過疎の町」を謳い、サテライトオフィス誘致などに尽力している。形はかなり異なるが、日和佐に新しい波が到来する様子は、当時と少し重なる思いがする。



親展文書綴

## 渭城中学校（現・城北高等学校）

昭和十年ごろから徳島県内で中学校進学を希望する者が急増し、なかでも徳島市内での入学難は深刻なものとなっており、市内に中学校を増設せよという要望が市民の間で高まっていた。当局もこの実現に努めたが、財政難のためなかなか見通しが立たずにいた。

当時の県知事荒木義夫、徳島市長藤岡直兵衛は、徳島県出身の実業家岡田勢一に助力を依頼した。岡田はこれを快諾し、昭和十五（一九四〇）年秋、本県育英事業費にと六五万円を寄付した。（『同窓会名簿1996 55年の沿革 創立の経緯』）

渭城中学校は、旧制中学校としては県内最後の設立であった。また、昭和二十二年四月に「学校教育法」に基づき新制高等学校が発足したことによって、翌年には「徳島県徳島第二高等学校」となった。旧制中学校としての期間は、わずか七年間であった。この七年間は、太平洋戦争の戦中・戦後にあたり、渭城中学校も、他の旧制中学校と同じく、勤労動員など大きく影響を受けた。ただ、昭和二十年の徳島大空襲では、校舎のすぐ南方まで焼夷弾攻撃を受けたが、校舎は被害を受けずに済んだ。多くの市内の学校は焼失してしまったため、徳島中学校、徳島師範学校などが、渭城中学校の校舎を借りて授業を行った。

### 田宮町の旧競馬場

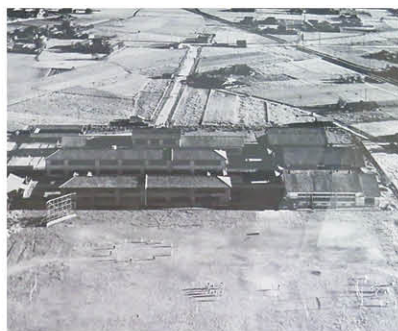
田宮町にあった競馬場の写真。渭城中学校校舎の設立場所は、佐古、蔵本などいくつか候補が挙がったが、最終的にこの旧競馬場に定められた。



田宮町の旧競馬場

### 渭城中学校創設時の全景写真

岡田勢一の寄付のうち五十五万円が中学校設立にあてられ、旧競馬場に創設された。校名は岡田や関係者の協議の末、旧徳島城の名をとって「渭城中学校」と決定した。



創設時の全景写真



## 展示資料一覧

No.	表 題	年 代	資料番号
<b>徳島中学校（現・城南高等学校）</b>			
1	明治四十一年入学学籍簿	明治41（1908）年	城南高等学校所蔵
2	徳島毎日新聞（徳中創立五十周年記念号）	昭和4（1929）年	城南高等学校所蔵
3	徳中生の居住を示す標札	昭和20（1945）年頃	城南高等学校所蔵
4	生徒必携	昭和17（1942）年	城南高等学校所蔵
<b>脇町中学校（現・脇町高等学校）</b>			
5	門標「徳島県立脇町中学校」	明治34（1901）年	脇町高等学校所蔵
6	冬服学生服・制帽	（大正期～昭和期）	脇町高等学校所蔵
7	自明治卅二年至同卅八年教務日誌	明治32（1899）年～	脇町高等学校所蔵
8	改築落成記念要覧	昭和9（1934）年	脇町高等学校所蔵
<b>富岡中学校（現・富岡西高等学校）</b>			
9	時報の鐘	明治43（1910）年	富岡西高等学校蔵
10	明治廿九年度以降 決算書類綴	明治29（1896）年	富岡西高等学校蔵
11	県例規綴 徳島県立富岡中学校	大正5（1916）年	K202200554
12	昭和二十二年四月起 寮務日誌 日新寮	昭和22（1947）年	K202200556
<b>撫養中学校（現・鳴門高等学校）</b>			
13	卒業アルバム（昭和6年）	昭和6（1931）年	鳴門高等学校所蔵
14	卒業アルバム（昭和8年）	昭和8（1933）年	鳴門高等学校所蔵
15	板東厩舎における軍事教練（写真パネル）	昭和9（1934）年	鳴門高等学校所蔵
16	校友会雑誌第七号	大正10（1921）年	イワ201913
<b>池田中学校（現・池田高等学校）</b>			
17	夏季休業中心得	昭和15（1940）年	池田高等学校所蔵
18	夏季心身鍛練生活心得	昭和16（1941）年	池田高等学校所蔵
19	校友会誌	昭和2（1927）年他	池田高等学校所蔵
20	通学用自転車鑑札	昭和10年代か	池田高等学校所蔵
<b>阿波中学校（現・阿波高等学校）</b>			
21	大正十三年四月起 教務日誌	大正13（1924）年	阿波高等学校所蔵
22	昭和五年三月起 職員会議録	昭和5（1930）年	阿波高等学校所蔵
23	徳島県立阿波中学校 正門	（昭和前期）	S200001865
24	『粟』	昭和3（1928）年	イワ201728ほか
<b>麻植中学校（現・川島高等学校）</b>			
25	大正十四年度 入学志願者名簿	大正14（1925）年	川島高等学校所蔵
26	（学級数削減に対する抗議書）	昭和8（1933）年か	川島高等学校所蔵
27	麻植中全景	昭和9（1934）年	S200003775
28	麻植教育 第一巻 第一号	昭和10（1935）年	イワム04509000
<b>海部中学校（後の日佐高等学校、現・海部高等学校）</b>			
29	第一回卒業記念アルバム	昭和6（1931）年	海部高等学校所蔵
30	親展文書綴	昭和12（1937）年～	海部高等学校所蔵
31	学校沿革史	昭和11（1936）年か	イワム04748
32	『濤聲』 創立記念号	昭和2（1927）年	イワ202061
<b>渭城中学校（現・城北高等学校）</b>			
33	創設時の全景写真	昭和18（1943）年ごろ	城北高等学校所蔵
34	昭和十八年度 徳島県立渭城中学校要覧	昭和18（1943）年	城北高等学校所蔵
35	徳島県立渭城中学校生徒募集ノ件（『徳島県報』掲載）	昭和16（1941）年	K200200741
36	徳島競馬場（田宮・今切）	昭和8（1933）年	S200003631

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

担当職員による  
展示解説

日時：11月23日（日・祝）・12月21日（日）・令和8年1月17日（土） いずれも午後1時30分から  
会場：文書館2階講座室・展示室